

写真①

# 旭川の古川のメム

写真①の「古川・メム」は、世界最初のアイヌ語辞書といわれる『蝦夷方言藻汐草』に記載されたもの。この書は、当時最高の蝦夷通詞(通訳)であった上原熊次郎が寛政四年に著し、文化元年(一八〇四年)に木版刊行された。この中で、「古川」のアイヌ語が「ムム」と記録されているのである。

一般的には、「ムム(mem)」は、「湧き水。泉。清水が湧いて出来ている池。または沼」を意味し、古川は「フシコベツ(husko-pet 古い・川)」あるいは、川名の〇〇を付けて「フシコベツ(〇〇)古い・川」である。

## 断章 旭川のアイヌ語地名研究

27

高橋 基

川」と呼称する。

実は、松浦武四郎も、嘉永三年(一八五〇年)に編纂したアイヌ語辞書『蝦夷語』に、上原同様に、「古川・メム」を採録している。もっとも、武四郎が収録した一四五一語の約八割は、『藻汐草』の写しということ、この「古川・メム」も写しの部類と推測される。

本連載の第二十二回で、安政四年(一八五七年)に松浦武四郎が記録した「ポロメム」(松浦の表記はホロメン)は、石狩川の古川で、亀吉川であることを検証した。正に「古川・メム」である。

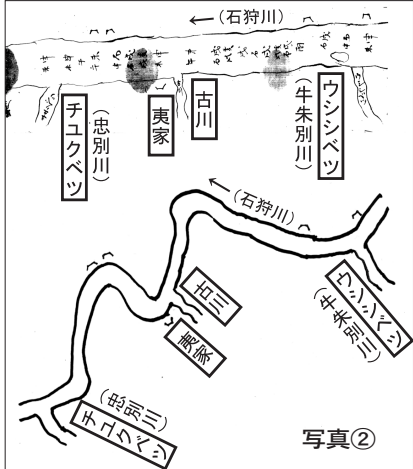
これも既述のように、明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、右のポロメムを、「ポロメム(poro-mem 大池)・メム」(石狩川ノ旧流瀧シテ池トナリタルモノ)とメムは、石狩川の旧流・古川と明記している。

更に、昭和三十一年に

知里貞志保は、『地名アイヌ語小辞典』の「メム(mem)」の項で、一般的な「泉池・泉沼・清水が湧いて出来ている池または沼で魚が多く入る所・湧きつぼ。」と書いた上で、

採集地または使用地を旭川市近文として、②「チカフミ」古い小川、古川の小川。」と記述している。

これらから勘案して、上原熊次郎が採録した「古川・メム」が、わずかに旭川に残されていたのではな



写真②

吉川につながる最も古い記録は、近藤重蔵が文化四年(一八〇七年)三月十三日(陽曆十一月十二日)に旭川の番屋に宿泊した時の記録である。

『石狩川川筋図』である。写真②は、その最後の部分で、ウツシベツ(牛朱別川)とチユクベツ(忠別川)のほぼ中間の石狩川左岸にこの「古川」が描かれている。略図は、川筋の干支から筆者が作成したもの。(近藤の川筋図については、第二回を参照いただきたい。なお、あさひかわ新聞のHP上でも閲覧可能です)

また、松浦武四郎と同じ安政四年三月十八日に、箱館奉行イシカリ詰の足軽・松田市太郎は、『安政四年イシカリ川水源見分書』で、メム川について「チクベツより凡一里位、字メム川一但蝦夷家大小九軒有之、地性宜敷平地にして而古川有満水之節は一圓川二相成」と書き、近藤同様に、忠別川と牛朱別川のほぼ中間にメム川があり、ここにも古川(ポンメム)があること、また、松浦武四郎の記録より一軒多い、九軒のコタンがあったと、貴重な記録を残している。(アイヌ語地名研究会幹事

※毎月第一週頁に掲載します